https://rodosoken.com/

島崎晴哉中央大学名誉教授・労働総研理事を偲んで

松丸　和夫

2007年６月26日、島崎晴哉先生の訃報が伝えられ、ご親族や大学関係者はもとより、労働総研会員、学会会員等多くの人々が突然のご逝去の報せに驚き、そして深い悲しみに包まれました。

島崎先生は、1924年長野県にお生まれになり、1941年中央大学第二予科に進学され、1944年同予科を兵役のため３年でご卒業になり、中央大学経済学部への復学後1949年３月にご卒業されました。先生の研究者・教育者としての歩みは、1949年４月に中央大学経済学部助手に就任された時から始まり、助手としての３年間を経て、1961年４月には同学部教授に就任されました。

先生は、学部教育において「社会政策」とならんで当時としても異例な新設科目の「労働運動史」を担当され、学生の教育に当たられました。1963年10月には、先駆的研究業績である『ドイツ労働運動史』（青木書店）を上梓され、その後1965年３月から１年５ヵ月に及ぶドイツ・オランダでの在外研究をされ、1967年、経済学博士の学位を授与されました。

この間、先生は学会や研究会を中心とした研究活動、学部と大学院における教育活動にたいへんご熱心に取り組まれながら、急速にマスプロ化が進んでいた中央大学における大学行政に関わる多くの重責を果たされてきました。1968年４月から1969年３月まで、バリケード封鎖とロックアウトの日々に激職の学生部長を務め、その後、1971年11月より、経済学部長・大学院経済学研究科委員長を２年間務められました。研究と教育という大学の本来的機能を果たせるよう大学を改革することに先生はご尽力されました。その後、1977年～78年の中央大学の多摩キャンパスへの移転期に、中央大学図書館長を務められ、膨大な図書館蔵書等の移送と新図書館の立ち上げにご尽力なされました。

学会活動においても、社会政策学会の幹事や現在活動休止中の労働運動史研究会の代表としてご尽力され、黒川俊雄慶應義塾大学名誉教授（労働総研・初代代表理事）の後を受けて、1988年５月から1990年４月まで社会政策学会代表幹事として、学会本部を代表し、運営の重責を果たされました。1989年12月に設立された労働総研に当初より参加し、理事、国際労働研究部会のメンバーとして、ドイツを初め多くの国の労働運動の調査・分析をなされ、全労連国際局と共同で毎年刊行されてきた『世界の労働者のたたかい』の執筆者として最期まで重要な役割を果たしてこられました。

島崎先生は、いつも穏やかな表情で、学生や労働運動活動家に接するときもにこやかに対応してくださいました。立派で権威のある学者であったにも関わらず、周囲へのお心遣いを絶やさない先生でした。

島崎先生が日本の労働問題研究と労働運動に与えてくださった多くのことを、私たちは共通の「宝」として受け継がせていただきます。戦争と貧困と失業に反対の立場を貫かれた「闘士」である先生が望まれたように、平和で、働くことがひとびとの幸せにつながる社会を目指して努力したいと思います。

島崎先生、どうぞ安らかにお眠り下さい。

（まつまる　かずお・理事・中央大学経済学部長）